

「力は弱さの中でこそ」

牧師 望月 達朗

今から約20年前、「多摩動物園」（東京都日野市）に3頭のゾウが暮らしていました。なかでも人気があったのがゾウの「アヌーラ」（現在も在園）です。当時の「アヌーラ」は、とりわけ大きな体をしていて、鼻も長く、大変得意げでありました。けれどもある日、原因不明の病気にかかって、高熱を出してしまいます。だんだん動きが鈍くなり、食欲もなくなっていきました。そこで、医者が大好物のバナナのなかに薬を入れて、バシないように食べさせようとはしますが、ゾウは嗅覚が鋭いので、決して食べようとはしません。注射での治療も、あの大きな体ではかなりの量が必要で、皮膚も分厚いですから、簡単には出来ません。飼育員も、どうして良いか分からず、「アヌーラ」のあまりの苦しそうな姿を見て、胸が張り裂けそうになっていました。

けれど、その時、思いがけないことが起こります。今にも倒れそうな「アヌーラ」の両サイドに、他の2頭のゾウが近づいて来て、体をそっと支え始めたのです。誰が命令した訳でもなく、その様な調教もしたことがなかったため、飼育員も驚きを隠せません。「アヌーラ」は、

安心したように眼を細め、じっと2頭に体をあずけます。他の2頭のゾウは、そのままの姿勢で一日中支え続け、決して離れようとはしませんでした。そればかりか「アヌーラ」が少しでも動こうとすると、それを敏感に感じ取って「アヌーラ」のスピードに合わせて歩くのだそうです。この密着状態が3週間も続きます。その間、「アヌーラ」から以前の淋しそうな表情は消え、心の底から安心しているように見えたといいます。しばらくすると、「アヌーラ」の体も調子を戻し始め、一人で歩けるまでに回復していきました。また、「アヌーラ」を支えていた2匹のゾウも、何事もなかったかのように、もとの生活に戻っていきます。

「（キリストの）力は弱さのなかでこそ十分に発揮されるのだ」（Ⅱコリント12章9節）と聖書は告げます。私達が弱くなった時に感じるのは、「自分は独りでは立ってられないのだ」という単純な事実です。ゾウのアヌーラのように、病気になったときが分かりやすいかもしれません。看病してくれる人、支えてくれる人がいなければ立ってられない自分の姿に気が付き、自分が支えられ

ていたことの有り難みを痛み知っています。これは、自分中心に周りを見ていたときには心から感じ得ないことです。そして、私達が弱くされたとき、私達にはある力が与えられています。それは、「人を助ける力」です。支えられたことがある、ゆるされたことがある、愛されたことがあるからこそ、今度は自分が誰かを支えることができ、ゆるすことができ、愛することができるのです。私達が弱くされる時というのは、そういう「人を助ける力」を私達の内側に溜め

込んでいる時なのだと私は思っています。「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ多いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」（Ⅱコリント 12章9節）。

多摩動物園には、今年新たな2匹のゾウがやってきたそうです。きっとアヌーラは、他の2匹のゾウが弱っているとき、“そっと”そばに寄り添って、支える側にまわっているに違いありません。



～ ようこそ吾妻教会へ～

5月19日（日）のペンテコステ礼拝において、福田一也さんの転入会式が行われました。心より歓迎申し上げます。



福田 一也

僕は福田一也です。埼玉福音キリスト教会から来ました。僕は小学5年生の時からそこに通い、1年間勉強して、小学6年生の10月3日に洗礼を受けました。教会に来ようと思った理由は、最初は母に誘われて日曜学校から通い始めました。最初の内は、日曜学校に通い、母が一般礼拝に出て、その礼拝が終わるのを待っていました。しかし、少したって僕も一般礼拝に出るようになり、その後勉強して、洗礼を受けました。そして日曜学校の司会などをやっていました。

中学2年生の1月に群馬に引っ越し、吾妻教会に通うようになりました。幼少の頃、吾妻教会に通っていたこともあって、初日から僕はほとんど馴染めました。未熟ですがこれからもよろしく申し上げます。

＝ 2013 年 吾妻教会全体修養会 ＝

9月29日(日)礼拝後、コニファーいわびつにて吾妻教会全体修養会が行われました。共に昼食のを持ち、その後、望月達朗牧師により、「祈りと教会」をテーマに発題がなされました。質問や意見を交えながら、祈りについての学びを深くすることができました。ここでは2名の方に感想を記していただきました。

✠✠ 丸山 幸一さん ✠✠

今回の修養会に参加させて頂く時、私が一番お尋ねしたかったのは、どうも現在の社会状況や自分自身の事を考えても、果たして祈りが届いているかわからない、そんな時でも、要は絶望の中でも祈るべきかどうか、という事でした。そして今、私は、絶望の中だからこそ祈るべきである、絶望の中でも祈る事ができる、絶望の中でも祈りが与えられている、と確信するに至りました。

修養会において、「祈り」とは「イエス・キリストを通して神に語りかけることである」と教えて頂きました。であるならば、もし絶望の中、キリスト者が祈らなければ、神に語りかける機会を自ら放棄してしまう事になります。確かに祈ったからといって、神がすぐに答えて下さるわけではありません。しかし、絶えず祈り続けることによって、絶望を分かち合い、希望に至る道が与えられ、愛を基に生きる事ができるよう導かれる、祈りとはそんな力を秘めたものなのではないかと改めて思えるのです。今回の修養会に参加させて頂く事により、私はとんだ思い違いをしている事に気づかされました。正直申しあげますと、穴があいたら入りたい心境ではあるのですが、それでもこの様な気づきを与えられた事に深く感謝し、今後も可能な限り礼拝に出席し、敬愛する兄弟姉妹の皆様と共に「祈り」を深めて参りたく存じます。最後に、この様な貴重な学びの機会をご用意して下さった望月達朗先生、奈津子先生、役員の皆様に、改めて感謝致します。

✠✠ 望月 光太さん ✠✠

今回の修養会での『祈りと教会』についての学びは、私にとっては大変意味のあるものでした。私は昨年カナダに8ヶ月ほど滞在しましたが、カナダの教会の多さは日本とは比較になりません。私は週に3～5回ほど教会の交わりに参加していました。私が印象を受けたのは、いくつかの会では必ず祈る時間をもつことでした。特に、お互

いの生活での悩みや恵みなどを共有し、そのことについて祈り合うのです。カナダで生活している間、この祈りにどれだけ支えられていたかわかりません。他者のための祈りにはまず、相手の話を「聴く」ことが必要になります。この聴くという行為は意外と労力が必要な行為です。自分ではない他者の思いを理解するのはなかなか骨が折れますし、相手の言葉の端々からも伝わってくる、言葉にしたいとできないような思いまで耳をすませ、相手のために祈ることは、愛がなくてはできない行為でしょう。私は、祈ること・祈られることから多くの励ましと恵みを受けました。

帰国後、祈りの減少は私にとって深刻な問題でした。お互いに祈る機会が少なくなったので一人で祈ることが必然と多くなりましたが、一人の祈りは寂しさを感じるものでした。加えて、内容も自己中心なものが多く、「～してください」「～となりますように」という「お願い」ばかりの内容になってしまうことが多かったのです。次第に、一人で祈ることへの不満や無意味さを感じるようになり、祈ることが少なくなっていきました。

このような中で、修養会の内容が「祈り」であることは、私に多くの示唆を与えてくれました。何よりも心に深く響いたのは「祈りの大前提」ということについてです。「あなた方の父は願う前から、あなたたちに何が必要か知っている(マタイ 6:8)」。最初は、「事前に知っているのなら祈る必要もないのではないのか？」と思いましたが、祈りは神様との人格的な交わり的手段であり、神様は私達のために祈りという手段を用意してくださっているということに気付き、はっとさせられました。神様は、私達のために祈ることを求めているのです。そして、私が捧げる身勝手な「お願い」ばかりの祈りさえ、事前に知った上で「聴いて」くださっているのでしょう。心が砕かれる思いでした。神様の寛容さと愛を、そして自分の身勝手さを、改めて思い知りました。自己中心からなかなか抜け出すことができないながらも、本当の意味で祈り深くありたいと思わされます。この素晴らしい修養会のために準備してく下さった望月先生に深く感謝します。

